

ロンドンのリトルテヘラン

写真・文 鈴木 均
Hitoshi Suzuki



ケンジントン宮殿とヴィクトリア女王の坐像。「リトルテヘラン」はここから徒歩で10分ほどのところにある

ロンドンへの一年間の赴任にあたってハイス
トリート・ケンジントンの傍に住むことにした
のは、近くのアールズコート駅が地下鉄のター
ミナル駅だからという極めて実利的な理由であ
った。だが住み始めてから数日して周辺を散策
するうち、家のすぐ近くの一角にイラン人の商
店が数軒軒を並べていることに気が付いた。
イランを研究対象とする地域研究者にとって
これは興味をそそられる。近代史におけるイラ
ンとイギリスの関係は、日本よりも歴史的に遙
かに長く深いものであるが、同時にその関係は
決して良好なものであったとは言い難い。イラ
ンの知識人が一般にイギリスに対してどのよう
なマイナスのイメージをもっているか、これは
イラン研究者にとっては常識に属する事実であ
る。だが逆にイギリスの側も、特に革命後のイ
ラン・イスラーム共和国体制に対しては決して
良いイメージを抱いている訳ではない。
二〇〇一年段階の人口統計ではイギリスに居
住していたイラン出身者は四万二三〇〇人であ
り、その半数以上の二五万人弱がロンドンで生
活していた。その後のONS (Office of Na-
tional Statistics) 推計によると、二〇一一年時点
で約八万三〇〇〇人のイラン出身者がおり、居
住都市はニューキャッスルやシェフィールドな
どに拡散する傾向が強くなっている。
日本に生活するイラン人の数が、不法滞在者
の急増が問題になったピークの時点で五万人程
度であったことを考えると、これはかなり多い
人数である。実際ロンドン市内を歩いていて服
装や身なりからは一見全くそれと判らない人々

店の正面にはキャビアの空き缶が鎮座する。
その上のイラン国旗は革命前のバージョン

店舗内にはイラン直送の食材がズラリと並び、
イラン料理には困らない



目抜き通りの外れて賑やかに軒を並べているイラン商店街の店舗

店の地下にはイラン映画の DVD やイラン音楽の CD がズラリと並んでいた

が、ふと気がつくとペルシャ語で会話しているという場面に遭遇することは決して珍しいことではない。

もっともこれはペルシャ語に限った事ではないだろう。実際ロンドンに住む外国出身者のなかで、イラン人が占める順位は二六位に過ぎない。フランス語やスペイン語、イタリア語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語……、ロンドンの街を歩いていて英語以外の言葉を耳にしないことの方が珍しいほどである。これはロンドンという都市が、ニューヨークやパリ、かつてのイスタンブールなどと同様に、世界でもごく例外的にしか存在しないコスモポリタンな性格をもっているからに他ならない。

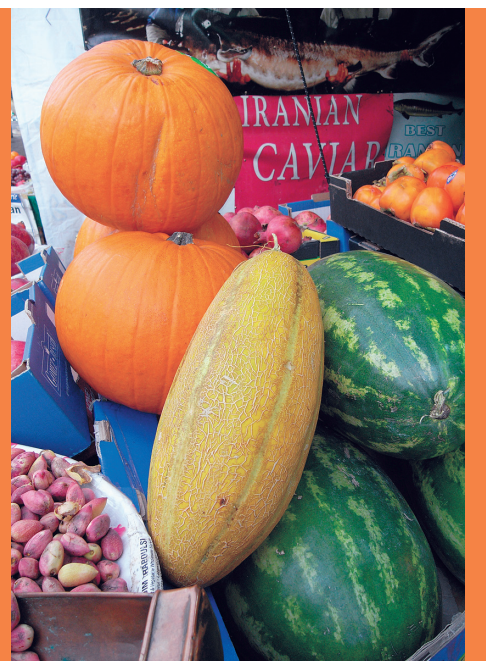
さて件のイラン商店街であるが、ハイストリート・ケンジントンの大通りに面して三件の雑貨店（北から順に、レザー、ザマーン、バハール）と、その南にイラン料理店のレストラン・アパダナが並んでいる。取材に訪れると、一番北のレザーを除いてその南側の二件の店舗とレストランについては最近まで同じ経営者のものであったことが判った。

今年の夏、レストラン・アパダナは新たに所有者が変わって店の内装などの模様替えが行われた。筆者が最初にこのレストランを本格的に訪れたのはその直前、七月一四日のことであった。イランとP5+1の核合意が成立した歴史的な日に、その様子をロンドンのイラン人がどう受け止めているかを知りたくなったのである。私はこの日の午後二時頃にウェブ報道で最終合意を知り、所属しているロンドン大学SOAS

店の奥に飾ってある「シャーンナーメ」の一場面を描いたタブロー。時代物のお宝である



3軒並ぶ商店街で最も古い中央の雑貨店ザマーン（1979年開店）の店頭



この中でイラン産のものは中央のメロンのみ。
ハロウィーンが近いので大きなカボチャも
売っている

のミニ環境を使って報道内容をひととおりチェックしたのち、夕方にレストラン・アパダナを訪れた。ロンドンで初めて口にする美味なチエロケバップを堪能した後チャイを飲んで休憩していたところ、店の主人が大通りに面した店の大窓を閉め始めた。そうこうするうちに店内の一角でやおらBBCによるロンドン在住イラン人へのインタビュが始まった。

少し離れた席で聴くともなしに聞いていると、インタビュの全体的なトーンとしてはイランの核合意について「今後万事が良くなるであろう兆候」と受け取っている由であった。以上のように、ロンドンのイラン人コミュニティにおける今回の核合意に対する評価は比較的冷静かつ好意的なものであったように思われる。

インタビュの終了後に取材を受けていたイラン系女性に訊ねてみたところ、これはイラン向けに流されているBBCペルシャ語放送ではないとのことであったが、いずれにしてもイラン国内で国営放送でなくイギリスBBCの方を選んで日常的に視聴しているイラン人は数多いイラン国内で彼らの英語によるインタビュを耳にしたイラン人もいたことであろう。

さて私がこの商店街を訪れて最初に知り合ったのが、元プロサッカー選手でナショナルチームにも所属していたというオミード氏である（一九七三年生れ）。彼はかつてアジア大会の試合で日本を訪れたこともあり、大の日本びいきである。七年ほど前にロンドンにきたが家族をイランに残しており、一二歳になる息子のM・アーベディーニ君はサッカーのナショナル・

1958年生まれ。日本貿易振興機構アジア経済研究所。イラン・アフガニスタンの地域研究専攻。今年7月のイランとP5+1の核合意について、実現の可能性が高いことをいち早く指摘してきた。著書に『現代イランの農村都市——革命・戦争と地方社会の変容』（勁草書房、2011年）がある。現在海外調査員としてロンドンに赴任中。



レストラン・アパダナは1967年の創業。ロンドンにはこうしたイラン料理店が何軒もある



レストラン・アパダナのボーイたちはいつも陽気である



アパダナで出してくれるチャイ。右のガンド（角砂糖）もイラン式である



レストラン・アパダナに設置してあるパン焼き窯。脚部を見ると移動式になっている

ジュニアチームのキャプテンだそうである。
だがそんな彼もロンドンの誰も相手を気にしない自由な雰囲気と経済的・文化的な豊かさは気に入っているようで、当然この地を離れる気持ちはないという。

オミード氏が働いている雑貨店ザマーンの人ザマーン氏にも話を伺った。彼によるとこの店はイラン国外での同種の店のなかで最も早くからオープンしたものであり（今から三六年前）、最初は肉屋だったのがスーパーになり、さらに最近は菓子類を扱うようになったとのことである。ケンジントンの周辺は以前からイラン人が最も多く住んでいる地域として知られているが、最近ではイラン人の富裕層はより巨きな住居を求めてロンドンの北のフィンチレイに住むことが多くなっているという。彼によればロンドンでの生活が長くなってもイランのことは年々忘れ難くなってきたとのこと、この辺の心情は海外に住む日本人と何ら変わるところがない。

こんな事をきっかけに始まったイラン商店街とのささやかな付き合いであるが、筆者はその後も週に一回程度は足を運んではペルシャ語新聞の『エッテラート国際版』や袋入りのナーン（イラン式パン）、瓶詰めのパクルスなどを購入している。ロンドンにあってもイラン人はイラン人であり、彼らは一樣にイランのことを誇りにしている。そんな彼らは少なくともイラン研究者の私にとって、一時期身を寄せているロンドンの地で最も心を許せる友人たちである。